

「見覚えがあるって、まさかここに来たことがあるのか？」
 ライナーに聞かれたクロアは、カーテンが閉まりきった窓の方を見た。

「ああ、ある。けどこのカーテンの向こうに見えるのが学園か、それとも街かまではわからないけど」

「さあ、とにかくこれでバイナリ野に仮想空間のデータを流すことはできました。早速移動しましょう」

ラクラはクロアの方を見ると、先導しろと言わんばかりに部屋のドアを指差した。
 ため息をつくくと、クロアは先頭に立ち、ドアノブをまわした。

ゆっくりとドアを開き、外を確認したクロアは、

「……よりもよって、ここかよ」

再びため息をつき、頭を抱えた。

クロアが外に出たのを確認した後、ライナー達もドアの外に出た。

「な、何だ、この街は!?」

ライナーはドアの外に広がる光景を見て、驚きの声を上げた。

自分達がいたのは、巨大なビルの屋上だった。ライナー達が出てきたドアは、そこに設置されたプレハブ小屋のものであったのである。

しかしもつと驚くべきは、自分達のいるビルの周囲には、数え切れないほど多くのビルが建っていることだった。そしてどのビルの壁にも看板が見える。
 「……女の子の絵が描かれた看板がやたらと多いな」
 ビルの屋上を囲む手すりから乗り出し、周囲を確認しながら言うアオト。
 言葉には出さなかったが、そりゃそうだろうな、とクロアは思った。
 この街の名前は、空葉原あきはばら。かつてクロアがフレリアとタイプした際に遊んだ、息抜きのゲームの舞台となった仮想の街だ。

ビルから出たアオト達は、大通りを目指して裏通りを進んでいた。

ビル街はいろいろな店が立ち並んでいるが、店の中はもちろん、街の中にも人影は見えない。空葉原は、無人の街だった。

「……不気味ね。まるで活気のある街の中から、人間だけが消えてしまったみたい」

ミシヤは何件目の店を覗きながら言った。店先で声をかけても、当然誰も出てくることはない。
 「ねえクロア、あなたはこの街を体験したことがあるんでしょ？ その時もこんな感じだったの？」

先頭を歩くクロアは、

「いや、大勢の人で賑わってたさ……っていうか、どうして空葉原のデータを使っただんだ？ 別に他のでもよかっただろ」

「いえ、この街が選ばれたのにはちゃんとした理由があります」

答えたラクラは、周囲を見回し何かを探していた。やがて細い曲がり角で何かを発見するとそちらを指で示した。

そこにあつたのは、空葉原の街の地図だった。

「ご覧の通り、この街は入り組んでいます。それも高層ビルが多数密集しているため、逃げるのはもちろん、隠れることもできます」

「ああ、なるほどな」

ラクラが何を言いたいのかを、ライナーは察した。クロアもミシャも同じだったが、アオトだけは首を傾げた。

「つまり、危なくなつた時はこの地形を利用して態勢を立て直すことができる、つてことだ。入り組んだ道に逃げ込むだけでも効果はあるが、ビルの中に入れば更に見つかる可能性が低くなるからな」

クロアの解説を聞き、ようやくアオトも納得した。

これから相手にしようとしているモノのことを思えば、退却や態勢の立て直しは必要不可欠だ。そう考えれば、確かにこの地形は適しているかもしれない。

とはいえ、街は完全な無人状態で、それらしきモノはどこにも見当たらない。

それでもクロアは、まるでどこに行けばいいのかがわかつているかのように、ひたすら道を

歩き続けている。

「ねえ、どこに向かって歩いてるの？ まさかがむしろに歩いていただけってことはないわよね？」

「この街の中心さ。ここが俺の知ってる空葉原のデータで作られた場所ということなら、街の中心にはアレがあるはずだからな。この世界において重要なもの、つまり導力ルートを変更するシステムは、そこにあるはずだ」

確信を持った声だった。

いったい街の中心に何があるのか。ライナー達はプレハブ小屋を出た後に見た、ビルの上からの光景を思い出した。

周囲はビルに囲まれていたが、少し離れたところには商店街らしきものが見えたのを思い出した。しかしそれは自分達が向かっている道とは正反対の方向である。今向かっている先には、巨大なドームのようなものが有ったのではなかったか。

「もしかして、向こうに見えていたドームに行くつもりなのか？」

ライナーの問いに、クロアはどう答えるべきか悩んだ後、

「いや、ドームっていうか……悪の秘密組織の秘密基地というか……」

「……秘密組織の秘密基地が、誰の目にも丸見え状態なうえに目立ちまくっていいのか？」
「この世界の設定だから、それを俺に言われても困る。ほら、大通りに出ればすぐ見えるぞ」

目の前に広い道が現れると、そこを渡った先には巨大なドームが目前に現れた。半球型のドームは、ぬいぐるみのクマの頭部を模したデザインになっていた。小さな丸い耳に円らな目、可愛らしく閉じられた口までついている。

「ほら、あの口のところが入り口になってるんだ……いろいろ突っ込みたい気持ちにはわかるが、それは今度ジャクリに言ってくれ」

ああ、と誰もが納得したが、ジャクリにそれを言う気にはなれなかった。それが原因で機嫌を悪くさせてしまったら、何をされるかわからない。

「……あれ？　なあ、あそこに誰かいらないか？」

入り口である口の部分、アオトはその前に人影があるのに気づいた。

巫女装束姿の、髪の高い少女だ。距離が若干離れているために正確なことは言えないが、彼女は入り口の前に座り眠っているようだ。

無人の街に突然現れたその少女。

「どういうことだ？　まさか、どこかでダイブした奴が紛れ込んだんじゃないのか？」

少女を見ながら言うアオトに、ラクラは、

「いえ、それはありません。もちろんこの世界のモブキャラである人物データが紛れ込んでいるということも考えられません。だとすると、あれは……」

「まさか、あれが具現化したセキユリティだったのか？」

頷いた。

「はい。その可能性が高い……いえ、確実にそうでしょう」

「ああ、俺もそう思う」

「私もよ」

「同じくだ。あの外見だけで危険だっていうのはよくわかるからな」

アオト以外の全員は、巫女少女を警戒していた。

しかし、それはメンテナンスロイドと戦った経験があるからこそできることだ。

その経験のないアオトにとっては、逆に余裕が生まれてしまっていた。

どれほど恐ろしい相手が出てくるのかと怯えていたところに、現れたのは可愛らしい少女である。無理もない話だ。

アオトは眠っている少女に、静かに近づいていく。

「ちょ、ちょっとアオト！　何してるの!？」

少女へ向かって歩を進めるアオトに、背後からミシャが声をかける。少女に気づかれないよう小声ではあったが、アオトはそれに気づいて振り向いた。

「寝てる今がチャンスだろ。それに、女の子一人に大勢でつても気が引けるからな。すぐに終わらせてくるぜ」

「ば、バカ、戻るんだアオト！　そいつは危険だ！」

クロアも慌てて声をかけるが、その時には距離が離れ過ぎていて、アオトの耳には届かなかった。緊張しながらゆっくりと歩を進めるアオト。

徐々に少女との距離が縮まっていくが、少女が目を開く様子はない。少女の前に辿り着いた時も、やはり少女は静かに眼を閉じたままだった。

「……へえ、ちよっと大人っぽいな」

メイメイと同じような服装しか見えなかったため、顔も同じくらい童顔かと思っていた。しかし近くで見ると、彼女より若干年上に思える顔立ちだった。

やはり人間でないことは確からしく、目を瞑った巫女少女は呼吸をしている様子がない。やはりセキュリティと見て間違いないだろう。

……見た目が女の子だから、ちよっと気は進まねえけど。

気づかれぬよう、そっと剣を取り出し、振り上げると、

「……ごめんな」

両腕に力を込め、少女の頭部に狙いを定めると、一気に振り下ろした。

嫌なものを見ることになるかと覚悟をしたアオトだったが、剣先が少女の頭部に当たる直前、少女に異変が生じた。

アオトが剣を振り下ろすよりも早く片腕が上がり、

「っ！」

アオトの剣は少女の人差し指と中指に挟まれ、停止した。

何が起きたのかを理解できず、アオトは少女に止められた剣を押したり引いたりする。しかし剣はビクともしなかった。

少女は静かに目を開けると、自分の手で止められた剣を動かそうと必死になっているアオトの姿を見た。

アオトは少女が目を開けたことに気づいていない。

「アオト！」

こちらへ駆けてくるライナーとクロアの声に、アオトはようやくはっとして、何が起きたのかを理解する。

……ヤバイ！

そう思った時、体がグッと前へ引っ張られた。少女が剣を自分の方へと引いたため、剣を握っていたアオトの体は前へつんのめる。

「おわっ!?」

突然のことで足を踏ん張って耐えることもできなかった。

つんのめった体が少女へと近づいていくと、アオトは側面、顔の右側から強い衝撃を受けた。ドンッ、と叩きつけられた何か。ぶつかった、と思うより早く、メキメキと骨の碎ける嫌な音が、体の内部から聞こえてくるのがわかった。それでも尚、アオトの顔は押され続ける。

時間にして一瞬の出来事が、アオトにはスローモーションのように感じられた。しかしそれは突如顔^{とつじょ}を襲った激痛によって終わりを迎え、アオトの意識は途切れた。

アオトの元へと急ぐライナーとクロアは、アオトが少女に殴られるのを目にした。恐ろしく速い、そして重々しい左の拳^{こぶし}がアオトの右頬に当たると、アオトの体が吹っ飛んだ。ライナー達に向かつて飛んできたアオトは、そのまま二人を通り過ぎ地面に叩きつけられる。それでも勢いは止まらずアスファルトの地面で数回バウンドした後、ゴロゴロと転がり隠れているミシヤ達の元まで行ったところで、ようやく止まった。

ライナーとクロアは足を止め、背後で倒れたアオトの方を見る。

ミシヤとラクラが声をかけ、肩を揺すっているが、反応がない。

やがてミシヤがうつぶせに倒れたアオトを起こそうと体を持ち上げるが、

「き、きやあああああつー！」

少女の一撃を受けたことにより変形したアオトの顔を見て、ミシヤは悲鳴を上げた。

隣のラクラも思わず口元を押さえているところを見るに、それだけ酷い状態なのだろう。

しかしライナーとクロアは、アオトではなく巫女少女の方を見た。

こちらを見ている。ライナー、クロア、そして隠れていたミシヤ達の姿も今の悲鳴でバレてしまった。

少女の体が、ゆっくりと立ち上がると、その背中、巫女服の下で何かが動きだした。

巫女服を破って飛び出したのは、鋼鉄の翼。正確に言えば戦闘用メンテナンスロイドの背にあるものと同じ、翼のように広がるブースターが彼女の背から生えてきた。それも、八つ。

それを見た瞬間、クロアが叫んだ。

「ライナー、いったん退却だ！」

「ああ、賛成だ！」

二人が走り出すと同時に、少女のブースターが唸り出した。少女の体が地面からふわりと浮き上がる。

ミシヤとラクラはライナー達の背後で、少女のブースターから光の粒子が翼のように噴き出したのを見た。

「ミシヤ、ラクラ、逃げるー！」

こちらへ走ってくるライナーからの指示に、ミシヤとラクラはすぐにアオトを抱え上げた。逃げるといつてもどこへ逃げればいいのかわからない。だが、とにかく今はあの少女から離れるのが先だ。

入り組んだビル街を、彼女達は必死になって走った。

アルトネリコ3 世界終焉の引鉄は少女の詩が弾く

完全新作アフターストーリー

2011年3月15日 上下巻 同時発売!!



下巻：384 ページ / 704 円 (税込)



上巻：336 ページ / 683 円 (税込)

作：富松元気 カバーイラスト・口絵：風良 挿絵：辻田裕子 (ガスト)

GA 文庫 (ソフトバンク クリエイティブ株式会社)

(C)GUST CO.,LTD. (C)NBGI